

横浜外国人居留地 ー居留地覚書と外国人墓地ー

2024. 10. 05 森 彩子

今から 165 年前、1859 年(安政 6)に日本は開国し、その開港場となった横浜には外国人居留地と日本人居住地が指定された。開港の翌年、現在の山下町の一部に外国人居留地が設けられるとその範囲は順次拡張されていった。

そこには、幕府と外国が取り交わした「横浜居留地覚書」などの取り決めが存在していた。

「横浜居留地覚書」とは、どのようなものだったのだろうか。

関内・山手・本牧地区の町の骨格を作ったその「覚書」などと、その条文に含まれた外国人墓地から、幕末から明治時代、確かにそこに存在していた外国人社会を想起してみたい。

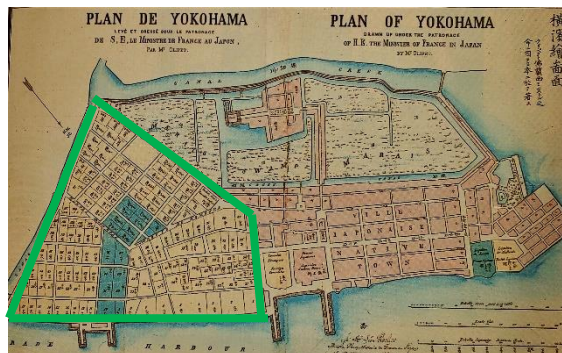
A. 横浜外国人居留地

外国人居留地とは？

幕末にアメリカなどと結ばれた通商条約によって、条約締結国民に居住と営業が許されるエリアのことを言う。居留地では、外国人に借地権と建物の所有権が認められたが、土地所有権は与えられなかった。日本には横浜、長崎、神戸、大阪、東京の五か所にあった。開港場となった横浜には一攫千金を狙う商人や、幕府の誘致によって出店した江戸の商人たちの店舗が増えていき、様々な業種の人々が住むようになり、市街化区域が拡大していった。

I. 外国人居留地に関する取り決め

外国人居留地がどのように広がっていったのか、幕府が取り交わした「覚書」などから見ていきたい。



横浜居留地と関内図 (ブルーム文庫加工)

1. 「横浜居留地覚書」 1864 年(元治元年 12 月)

居留地の建設も進み居留民の数も増えていくなかで、攘夷運動が高まりをみせる。1862 年(文久 2)には、生麦事件など多くの外国人襲撃事件が起こり、居留地襲撃の噂も広がった。1863 年(文久 3)の薩英戦争の後には、英仏両国軍の横浜駐屯が始まる。更に、1864 年には下関砲撃事件が起こる。居留地居留民も自ら義勇隊を編成し、外国人の自治意識は高まっていった。そして、外国人が横浜でもっと安全に暮らせるよう様々な施設の整備や、待遇改善を幕府に求めていくことになる。

このような状況を背景として、幕府と英米仏蘭の四ヶ国間で結ばれたのが「横浜居留地覚書」である。これは、外国側の一方的な提案だったが、この時(1864)、四ヶ国連合艦隊による下関砲撃事件のさなかで幕府も彼らの要求を受け入れざるを得なかった。

この「覚書」の締結によって、居留地は出島状態にあった関内地区から山手まで広がり、現在の山手地区(赤枠)が新たに外国人居留地に編入される。そして、旧居留地(山下居留地・緑枠)は外国商社が立ち並ぶ商業地区、山手居留地(赤枠)は外国人の住宅地域としての街並みを形成していくことになる。

また、山手・本牧・根岸に様々な外国人のための施設が作られることになった。

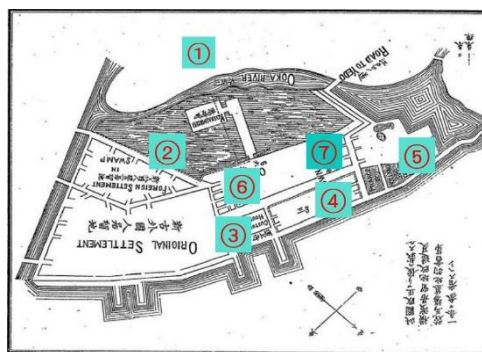


「銅板横浜地図」(石黒コレクションを加工)

「横浜居留地覚書」の内容：12条からなる

- ・ 第一条：吉田新田の沼地を埋め立て、そこに軍事訓練場と競馬場をつくること(右図①)
- ・ 第二条：病院の増設)
- ・ 第三条：**居留地の大幅拡大と外国人墓地の拡張**

横浜で暮らす外国人も増え、当初の関内地区居留地では手狭になったことから、山手地区まで居留地を拡張した。これが、現在の山手の原型である。そこには、洋館や教会、ミッションスクール、劇場、レストランなど様々な施設などが作られた。また、人口増加により、横浜で亡くなる外国人も増え、増徳院が提供していた墓所も手狭になったことから、現在の山手外国人墓地が整備された。



「覚書補足地図」(加工)

- ・ 第四条：**公設屠牛場の造営**

居留地の外の千代崎川河口に公設屠牛場が設けられた。(当時の日本では、農耕用の家畜として牛を飼っていたが、牛乳を飲んだり食用として牛を食べる文化はなかった。開港当初は、牛を船で日本まで運び、居留地内で食肉用に加工していた) その後、日本でも「牛鍋」など牛肉を食する文化が始まる。

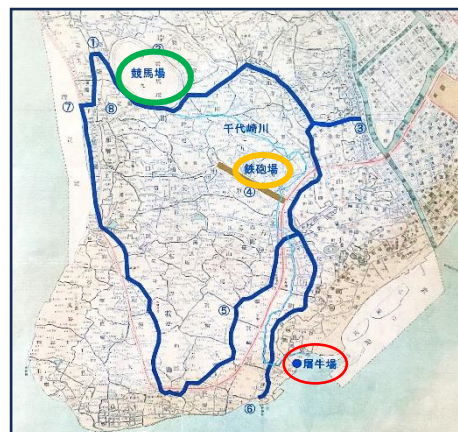
- ・ 第五条：掘割の中の沼地を埋め立てること(横浜新田・太田屋新田)(②)
- ・ 第六条：領事館のこと(③)
- ・ 第七条：日本人市街の海岸一帯の雑居地化(④)
- ・ 第八条：江戸の領事館の替地を用意すること(⑤)
- ・ 第九条：士官用の集会所と公園の設置(⑥)
- ・ 第十条：日本人が食物を商う市場の設置(⑦)

- ・ 第十一条：**外国人遊歩道の設置**

居留地外国人には、当時「外国人遊歩規定」が定められており、開港場から40km 以外の自由な移動が禁じられていた。そのため、当初から運動や健康、リフレッシュの

ための遊歩道や競馬場の設置を求めている。この遊歩道は、幅3間(5.45m)、延長4kmと整備され、慶応3年(1865)には完成している。

外国人が安全に散歩や乗馬ができるよう、見張り番屋が置かれた。幕府は、この沿道の民家13戸に命じて、外国人の休憩所を開かせ、そこで茶などを出さすサービスも始まった。それが女性を置いて接客する「チャブ屋」につながっていった、との説もある。



外国人遊歩道と所施設(石黒コレクション加工)

本牧は古くから景勝地として知られ、外国人たちは本牧海岸をミシシッピーベイと呼んでいた。

明治3年には、日本に住む外国人向けの新聞には、「本牧は美しい場所だ」という記事が掲載され、風光明媚な場所として外国人が別荘を建てたり居留地から移住したりした。

この遊歩道は、日本人が利用する本牧・山手のメインストリートとなり、市街地の整備・拡張へと繋がっていった。



「外国人遊歩道地図」 横浜開港資料館

・ **鉄砲場の設置(射撃場)** (現在の大和町商店街)

開港場から近く、左右の丘に囲まれた真っ直ぐ細長い谷戸は格好の場所だった。幕府は水田だったこの谷戸を根岸村から借りあげ外国軍に提供した。ここでは、射撃大会も行われた。

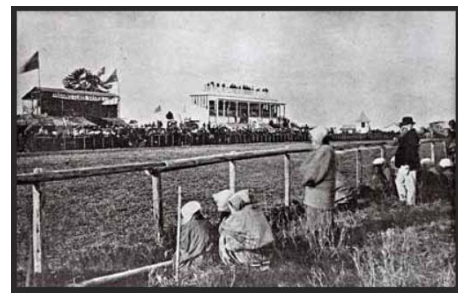


「スイスライフル射撃大会」 「The far east」より

・ **横浜競馬場の設置** (現在の根岸森林公園)

当時、競馬場は欧米人富裕層の社交場としての役割を担うものだった。外国人遊歩道沿いの根岸の丘に建設された競馬場は、芝生のコースを整えた本格的な施設となった。

・ 第十二条：外国人が日本に支払うべき地代の2割を差し引き、これを居留地の自治機関の運営資金とする)



「競馬を見物する日本人」 1871年(明治3)

2. 「横浜居留地改造及競馬場墓地等約書」(1866年(慶応2)12月)

覚書から3年後の1866年(慶応2)12月、幕府と外国公使団との間で、「横浜居留地改造及競馬場墓地等約書」が締結された。

これは、1866年(慶応2)の大火後の再建計画を盛り込んだものだった。

この規則は、日本の近代都市計画の始まりともいべき性格を持っており、現在の関内地区の原型が作られたのであった。



「日本大通り」 横浜開港資料館

- ・遊郭を移転させ跡地を公園にする
- ・日本大通りを作る(上図)
- ・下水を完備
- ・建物の耐火性を高める
- ・山手に公園を作る、などが盛り込まれた12条だった。

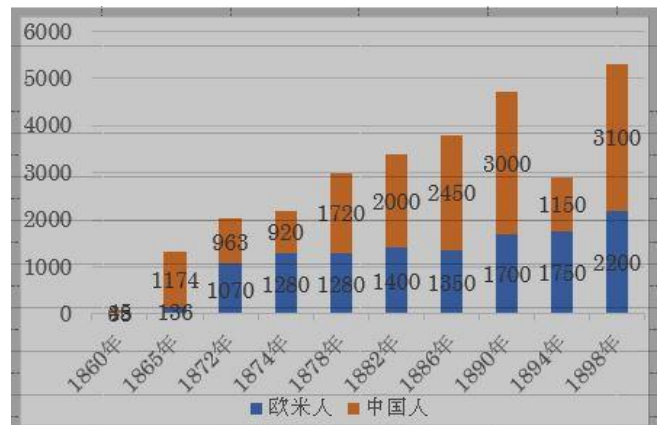
この契約書に基づき、翌年には山手地区の土地競売が始まり、横浜の都市整備は幕府から明治政府に引き継がれ、進められていった。

II. 居留地の移り変わり

1. 「居留地の人口推移」

(1860(万延元年)－1899(明治31)、約40年間の人口推移)

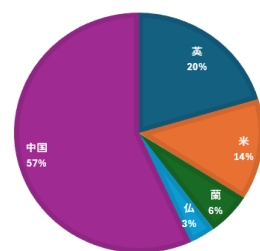
開港翌年の1860年(万延元年)は計80人ほどだった人口が1865年(慶応元年)には計1300人、1872年(明治4)には計2033人と当初の25倍に増え、1899年(明治32)には5000人を超える人口となった。



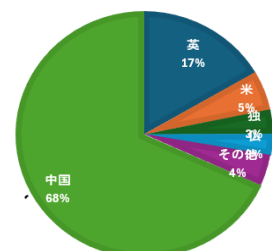
「居留地の人口推移」(図説横浜外国人居留地)加工

2. 「居留地の人口構成」

欧米人は開国当初から英国人が多く、米、蘭、仏、独と続く。全体の6割強を中国人が占める。中国人は貿易の仲介や外国商館の使用人やホテル・レストランなどのサービス業などに従事していた。



1860年(万延元年)

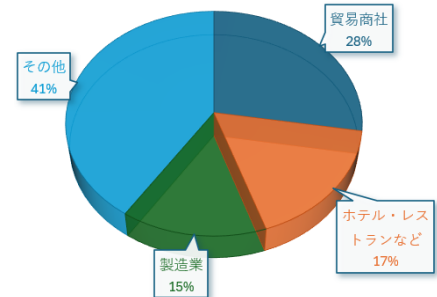


1890年代

3. 「業種別割合」

1893年の統計では、貿易商社 27.6%、ホテル・レストランなどサービス業 17.2%、家具や繊維品の製造業 14.5%、その他 40.7%であった。

(貿易業者が多いのは当然として、製造業・店舗商業の数が多いのは、寄港船やその旅客・船員の需要に応じるためと思われる)



業種別割合(1893年) 統計を加工

4. 「居留地借地リスト」を元に居住地をたどる。

III. 廃止される居留地制度

① 開国以来、日本は不平等条約の下にあり、それを改正することは日本の悲願だった。1894年(明治27)、「日英通商航海条約」締結で、領事裁判権(治外法権)の廃止と、関税自主権の一部回復に成功。(関税自主権を完全に回復したのは、その17年後の1911年(明治44)であった)

② その5年後、1899年(明治32)に居留地制度は廃止された。

これにより、居留地の外国人は、日本の法律に従う代わりに日本中どこでも居住・営業が出来るようになった。

居留地時代は40年間続き、それは決して短い期間ではなかった。そこで作られた西欧人社会の文化と生活習慣は、制度撤廃後もこの地で継続された。

そして、1923年(大正12)の関東大震災まで、旧居留地には居留地時代とあまり変わらない街並みがあった。

③ 関東大震災では、横浜は壊滅的な被害をうけた。

震災の死者数105,000人のうち、横浜の死者数23,000人、その内、在留外国人死者数は1789人、負傷者数21343人、不明1000人にのぼった。

多くの外国人は山手地区を去り、更に、その後、第二次世界大戦が起こる。中国人はその都度、自分たちの共同体を再建したが、欧米人の共同体は再建されなかった。現在、「過去の思い出」として残されているのは、わずかな洋館と外国人墓地だけになってしまった。

*横浜が開港してから約40年の長きに亘り、そこに居留地という外国人社会が営まれていた。日本人は彼らを通して西欧文明の影響を受けた。中国人を含めて、それぞれ異なる価値観や生活様式を持つ人々が共存していたこと、文化と民族の多様性を許容していたこと、それが横浜という都市の持つ性格(国際性)を形作ったのである。

B. 外国人墓地

外国人墓地は、現在、函館、東京、横浜、神戸、長崎、那覇の6都市にある。そして、横浜には4つの外国人墓地が存在する。

- ① 山手外人墓地（横浜外国人墓地）
- ② 根岸外人墓地（山手駅そば）
- ③ 中華義荘（中区大芝台、山元町）
- ④ 英連邦戦死者墓地（保土ヶ谷）

ここでは、「横浜外国人墓地」の始まりに触れたい。



「東海道名所之内横浜風景」（異人墓とある）五雲亭貞秀

山手外国人墓地

現在、この横浜外国人墓地は、40数か国、4000人超が眠り、激動の幕末から日本と外国とを結びつけた横浜の歴史を伝える場所となっている。

その墓域5,600坪という広さと墓石デザインの珍しさ、見晴らしの美しさなどから横浜有数の観光地となっている。



横浜山手外国人墓地

外国人墓地の成り立ち

- ① 1854年(安政元年)、アメリカのペリー艦隊が横浜沖に停泊中に、ミシシッピー号の乗組員のロバート・ウィリアムズ二等兵が死亡、(現在の元町にあった)増徳院の境内の土地に埋葬された。「海に見える場所」という条件にも合い、これが先例となり**墓地の始め**となる。



「ウィリアムズの葬儀」（外人墓地略誌）

その葬儀の様子が『ペリー艦隊日本遠征記』には次のように記されている。

「群衆も集まってきて好奇心あふれる眼で、しかし、礼儀正しく敬意を払いながら、葬列が物悲しい太鼓の音に合わせて静々と行進するのを眺めていた」

(右上図は、警備に当たる松代藩の絵師が描いたもの)

- ②開港直後の1859年(安政6)、来日中のロシア使節の随員、モフェトとソコロフが、攘夷派武士に横浜市中で殺害され、増徳院に隣接する土地に埋葬された。
- ③来日する外国人が増加すると共に、日本で亡くなる外国人も増えていく。

1861年(文久元年)外国人専用の墓域を定めるために日本人の墓地が移転された。

④その後、攘夷の嵐が収まってきた1864年(元治元年)『横浜居留地覚書』が幕府と米英仏蘭の公使との間で締結され、墓域が拡張されることになった。

⑤更に、1866年(慶応2)『横浜居留地改造及び競馬場墓地等約書』によって、ほぼ現在の墓域まで拡張された。

(その後、1871年(明治4)に中国人墓地は移転。関東大震災の後、増徳院も平楽に移転する)

2. 横浜外国人墓地に眠る人びと

幕末1861年から1897年まで日本で亡くなった外国人は400名を超えと言われる。

その人たちは、居留地の貿易と産業を支えたひとや、日本の近代化に貢献したひと、文化交流に尽くしたひと、教養や娯楽に活躍したひと、伝道と教育に生涯を捧げたひと、外国人殺傷事件の犠牲者になったひとなど様々だが、その生涯を異国の地で終え、遠く離れた横浜の丘に眠っている。



「最初の墓域」(明治4) 横浜開港資料館

「横浜外国人墓地」というと、よく「日本の近代化に貢献した外国人」が永眠する場所として紹介されることが多い。しかし、文字通り「日本の近代化に貢献した外国人たち」と言えるのは、政府に雇用された、いわゆるお雇い外国人たちだった。

被葬者の多くは、自分たちの存在が日本人にとって持つ意味などほとんど意識せずに、ひたすらビジネスに励み、自分の信条に生き、生活を楽しんだ人たちであった。

林立する墓標の一つ一つに、かつて横浜に存在した外国人共同体の歴史が刻み込まれている。

主な参考文献：

- ・『横浜居留地覚書』 国立国会図書館デジタルコレクション
- ・『開港場 横浜ものがたり』 横浜開港資料館 2004
- ・『市民グラフ ヨコハマ』 No. 33 横浜市市民局 1980
- ・『横浜市史 第2巻』 横浜市 1959
- ・『横浜市史 第3巻』 横浜市 1963
- ・『図説 横浜外国人居留地』 開港資料館編 有隣堂 1998
- ・『横浜外国人墓地に眠る人々』 斎藤多喜夫 有隣堂 2013
- ・横浜外国人墓地資料館 展示資料
- ・横浜八聖殿郷土資料館 展示資料
- ・『古き横浜の壊滅』 オーティス・M・プール 有隣堂 1976